



昭和十六年

七月

(夏休號)

都の子、村の子

子どもは親の住むところに生まれ、ここで育てられる。子どもの幸不幸が、先づこゝから考へられますね。

都育ちの子を、不幸といふのは言葉が過激でせう。しかし、そこが、幼児にとつて決して幸な場所でないことだけは否認できません。殊に大都會の場合そうです。大都會とは、空氣の悪いところですよ。この日光は塵埃に紫外線を吸収されたかすのやうなものです。更に、耳にも目にも、何んといふ刺戟の過度なところですよ。——大通りが繁昌してゐる。交通機關が完備してゐる。娯樂機關が澤山ある。

うまいものがいろいろある。そんなことは、一つも、幼児の求めてゐる快樂ではありません。おとなが、その爲に都會を好むとすれば、幼児はその犠牲になつてゐるといつていゝ位です。

それに較べて、村の子の、何んといふ幸なこととせう。恐らく、幼児の一番快しと樂しとするものは、皆ふんだんに、しかも、どんな家の子にも均等に、そこで與へられるのです。そこでは、都會の子のやうに、楽しいことは有害なことだといふやうな、變な目にあふことはありません。強い日光、清い空氣、豊かな自然、殊に不自然な刺戟のない靜かな環境。ほんとうに、幼児の樂園です。親として、考へさせられますね。

山の夏休み

○朝夕の氣候の變化がはげしいから、その用心が大事とか、草原に毒蟲がゐたりするから注意することゝか、そういふ方のことはお醫者さんから伺ふとして、山は何んといつても、幼い子には單調ですから、折角いゝ處にゐて、運動が不足するとか、退屈して氣が鬱るとかいふことがあり勝ちです。お母さんは、子どもの爲に、生活を豊富にし、變化を與へるための工夫を、豫め用意する必要がありません。涼しい土地ですし、いくらでも面白い遊び仕事も出来る筈です。

○山での鍛錬は、なんといつても足の鍛錬ですが、坂を登るといふことは、全身的に特に子どもの心臓を強くするのにいいことです。平生平坦な路ばかり歩いてゐる町の子には、これが何よりでせう。前人未踏の峯にクリンミングを試みなくともいゝが、毎日必ず坂を歩かせませう。